

真夏日も荷風もとめて本八幡

敬勝

芳賀 雅美

2026年5月29日午後、今年2回目となる東京桑野会「歴史探訪散歩の会」ショート版を実施しました。平田勝也・首藤敬勝・小林伸久・渡辺真佐夫の各氏と世話人の芳賀雅美を加え5名がJR本八幡駅北口に集合し、市川市八幡近隣をぐるりと一回り、終着点のJR本八幡駅までの5km弱の道程で、明治末から昭和にかけて活躍した小説家の「永井荷風」や放浪の画家「山下清」、脚本家の「水木洋子」にスポットをあてて、彼らが愛した市川市八幡地区を散策しました。今年初の真夏日で31℃まで気温が上がりましたが、やや雲が多いものの晴天で風が気持ち良い一日でした。ちょっと湿度が低かったかも。

散歩は、まずJR本八幡駅北口側のロータリーを出発、駅前再開発のため今年いっぱい取り壊される予定の元百貨店だった商業ビル「パティオ」やそれに連なる商店ビルを撮影。そして居酒屋や飲食店、コンビニが並ぶ狭い北口商店街（八幡一番街）を進むと、緑地に白抜きで「サイゼリヤ」と書かれた看板が見えてくる。おなじみイタリアンレストラン「サイゼリヤ」の1号店である。ここもどうやら取り壊される予定で、この記念館が見学できるのも今年限りと言う。再開発後の記念館保存はないとされている。見るなら今でしょ!!

サイゼリヤ1号店・教育記念館 ⇒
再開発後は、40階と24階の下層階店舗付の高層マンションが建つ予定である。その周りに広い公園や広場を設定する構想である。

そのまま東に歩き千葉街道（国道14号）に出ると、こんもりした小さな森が現れる。ここが「八幡の藪知らずの森」、古来より禁足地として「入ると二度と出られない」場所。



解体予定のパティオ
JR本八幡駅北口



あの水戸の黄門様も迷い込んだそうだ。



八幡の藪知らず

藪知らずの森の真ん前、千葉街道を渡ると市川市役所の第一庁舎がある。ここの1階に「永井荷風の書斎」が再現されている。



等身大の荷風人形



↑ 2020年12月完工の新庁舎

八幡3丁目の最後の住居内を再現

市庁舎を出て葛飾八幡宮へ。ここは「八幡」の町名の由来となる場所である。寛平年間（889年-898年）に宇多天皇の勅命により石清水八幡宮を勧請して建立されたと伝えられている。平将門や源頼朝などの武人も必勝祈願に参詣した。



京葉道路・国道沿い「吉ノ鳥居」



京成電鉄の踏切越しに見る



八幡宮の参道沿い 句碑

富士山登頂の平田さん(境内)

旧県社・下総國葛飾八幡宮を参拝し、境内を散策。重文指定の千本イチョウや鐘撞堂、参道に『随神門』＝神仏分離以前は別当法漸寺の仁王門＝がある。

一行は八幡宮裏より境内を出て、水木洋子邸へ散歩していく。この日は休館日（月に2日しか開館せず）



記念撮影パチリ。

脚本家・水木洋子はここで37歳から亡くなる92歳までの55年間を過ごした。死後遺言により、市川市に寄贈されたのである。1959年公開の大東映画「キクとイサム」彼女が48歳時の作品で、会津磐梯山麓の山村を舞台とした。監督・今井正。「浮雲」・「女の一生」・「ひめゆりの塔」・「おとうと」等、女性の視線で描いた作品が多い。NHK大河「竜馬がゆく」も彼女の脚本である。



り「おとうと」等、女性の視線で描いた作品が多い。NHK大河「竜馬がゆく」も彼女の脚本である。



◆ 永井 荷風



◆ 山下 清



◆ 水木 洋子

次に訪れたのは、放浪の天才画家「山下清」の育った八幡学園の跡地である。山下清が12歳の時、1934年5月に母子家庭で知的障害と反抗的だったため預けられた施設で、1928年（昭和3年）12月に設立され現在も実在する「福祉型障害児入所施設」。八幡4丁目から移転し、現在は市川市本北方3丁目に現存する。「八幡学園」という名称は同じで現在18歳以下の障害児60名が暮らしている。八幡の跡地には看板も標識もない。

西にしばらく歩くと、永井荷風が通った銭湯「菅野湯」跡地がある。2020年12月まで運営していたが現在は建物も解体し、駐車場になっている。しばし休憩。

白幡天神社へ。1180年（治承4年）、源頼朝が安房国に旗揚げしたとき、菅野の地に白旗を揚げたことから白幡宮と名付けられたと伝えられる。後に菅原道真を合祀したため、「天神社」と呼ばれるようになった。境内に永井荷風の句碑がある。荷風の散歩道沿いとなる。



隣接して弘法大師（空海）由来の真言宗の寺

「菅野のお不動様」山王山不動院がある。818年に嵯峨天皇の勅旨により空海が彫刻した8躯体の「不動明王」の一つが安置されている。

ご本尊の不動明王は2007年に修復され色鮮やかに再生した。弘法大師の銅像も建つ。不動明王、本物？真間山・弘法寺にも来たと言うが・・・



散歩も終盤を迎え、本八幡駅に向かって南下する。「荷風の散歩道」と名付けられた商店街を歩く。荷風も歩いたが、駅周辺には超高層のマンションが5棟も建ち並び、古には想像もできなかった風景が広がっている。

1957年〈昭和32年〉3月市川市八幡町四丁目1224番地（現八幡3丁目25-8）に転居。終焉の地となった。2年間の住まいだが、現在は、永井壯一郎氏（荷風の孫）が住んでいる。死の前日1959年4月29日の夕食はいつもの大黒屋のカツ丼と日本酒1合。翌朝に通いの女中が遺体を発見した。胃潰瘍による吐血で吐しゃ物による窒息と推定。未消化のカツ丼が認められた。大黒屋は2017年6月30日にて閉店廃業し、予備校・市進学院に所有が移転した。



永井荷風 終焉の地
(永井の表札が門扉に)



大黒屋跡地



大黒屋は京成電鉄八幡駅のすぐ北側、ホームからも見える位置にある。荷風の時代には大黒屋の目の前に北口改札があった。浅草からの帰りは便利だったであろう。

散歩の会は京成電鉄の踏切を渡り、都営地下鉄本八幡駅のA6出口付近で散会しました。有志一行はカラカラに乾いた咽喉を潤すため、JR本八幡駅北口広場まで戻り焼き鳥屋でビールを飲みながら反省会？

今回の散歩会も、中身の濃く味わいの深い、充実した一日でした。次回もお楽しみに!!

ここまでは、【東京桑野会86期 散歩会の世話人 芳賀 雅美】記



←参加者には、φ38mmの特製デザイン缶バッチを差し上げています。

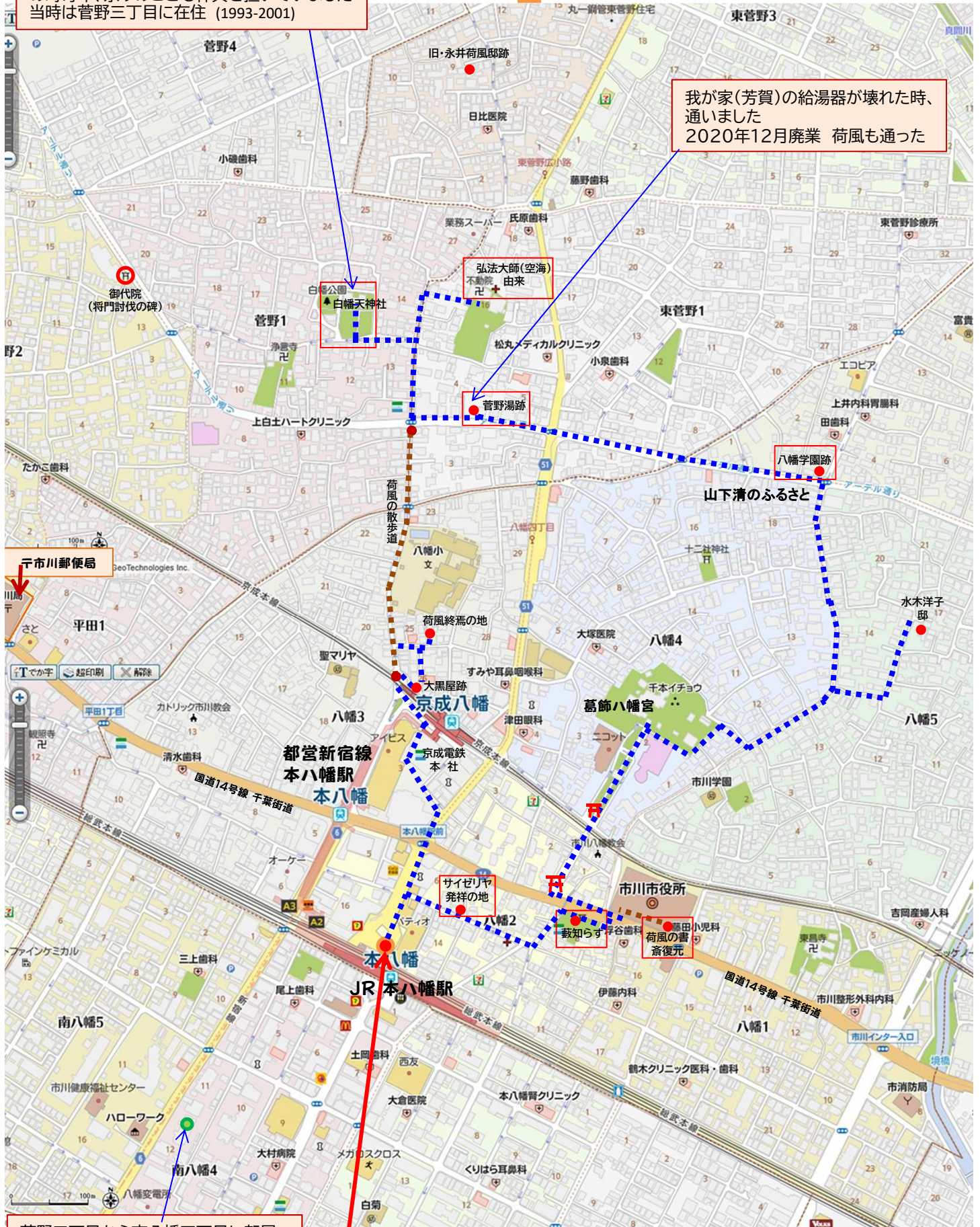
散歩ルート概略図

芳賀の現自宅は
このすぐ先です

私(芳賀)は、市川市民となって
1993年8月から数え 33年と
なります

我が家(芳賀)の子供達が小学生《菅野小学校》
の時毎年、祭りのこども神輿を担いでいました
当時は菅野三丁目に在住 (1993-2001)

我が家(芳賀)の給湯器が壊れた時、
通いました
2020年12月廃業 荷風も通った



菅野三丁目から南八幡四丁目に転居
芳賀10年間在住 (2001-2011)
私個人の話はどうでもいいか？

出発地点&ゴール地点(JR 本八幡駅北口) 同一です

本八幡界隈のウォーキング

平田 勝也

本年3月28日芳賀雅美さんが計画された、東京桑野会「第二回歴史探訪散歩の会」に参加させて頂き、芳賀雅美・首藤敬勝・小林伸久・渡辺真佐夫各氏と平田勝也の5名がJR本八幡駅前に集い、周辺の名所旧跡を中心に色々と寄り道をしながら5月末とは言うものの真夏並みの炎天下をじっくり且つたつぷりと約5kmを心行くまで散策しました。

この件については、芳賀雅美さんが「真夏日も荷風もとめて本八幡」に的確に漏れなく記載なさっているので、ここでは重複を避け本八幡一帯の基盤をなす地形地質や風土並びに歴史とゆかりの芸術家達の印象など、少し違った観点から私なりの感想を述べさせていただきます。

本八幡一帯は東京湾岸低地の一角をなし、飛鳥時代の律令制定下で下総国(しもうさのくに)と呼ばれており、沖積層からなる平坦地と下総層群からなる洪積層からなる丘陵から構成されています。更に、千葉県全体では東と南が太平洋に面し、西は東京湾、北西と北は江戸川・利根川に囲まれた地域です。県北部は広大な下総台地が広がり、関東ローム層による平坦で緩やかな地形が特徴で、標高は20~40m程度です。南部は上総丘陵や安房丘陵を含む小起伏山地で、標高数十~300mの丘陵地帯が広がります。沿岸部には九十九里低地や東京湾沿岸低地があり、河川沿いには谷底低地が形成されています。県全体の平均海拔は49mと低平で、全国で最も最高標高の低い県です。



P-1 本八幡周辺の地質区分
(国土地理院) 写りが悪いです

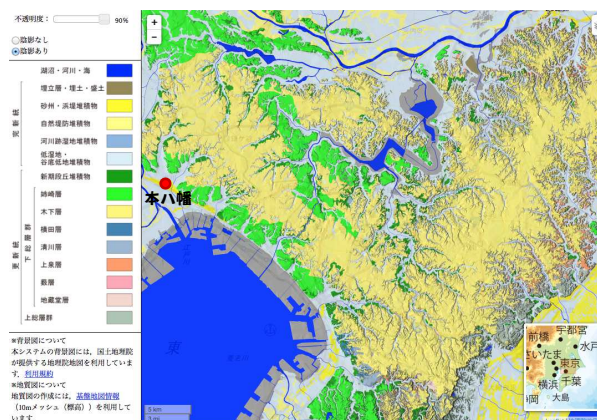
そもそも日本列島の歴史は4億年程度までは遡ることが出来るとされていますが、千葉県一帯は新第三紀中新世から鮮新世(約2,300万年前から約258万年前)に形成された三浦層群とこれらを不整合に覆う上総層群が基盤をなす地層が地表では分布しています。地質学では、地層は基本的に重力に従って下から上に向かって堆積する、下にあるものほど古い、という「地層累重の法則」からなっており、褶曲・断層・火成活動などの例外を除き、成立します。したがって、

本八幡一帯は地表付近では下総層群木下層が最も古く、これを常総層が不整合に覆い、さらにこれらを砂州・浜堤堆積物が覆い、最上位を低湿地・谷底低湿地堆積物・埋立地人工物が覆っています。このように平坦地は地質学的に新しい地層から構成されています。

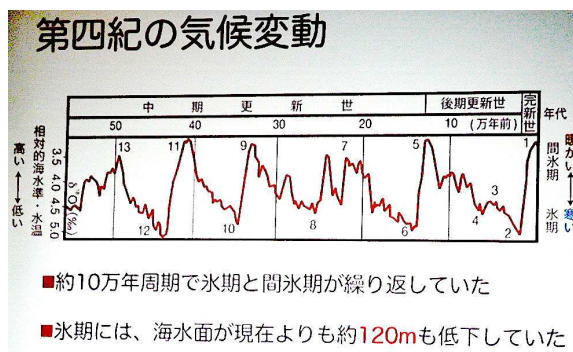
因みに、千葉市南方に隣接する市原市には「チバニアン」と呼ばれる地質時代の名称で、約77万4千年前から12万9千年前の中期更新世に相当する国際標準模式地に選定され、地磁気逆転の記録が世界で最も明瞭に残っていることが特徴です。(産業技術総合研究所)

千葉県の属する関東平野の約5回の海進海退の変動は、約40～10万年前の古東京湾の形成から始まり、現在の平野が形成される過程において重要な役割を果たしたとされています。これらの地殻変動は、深谷(主に群馬県)・綾瀬川(主に埼玉県)活断層や近傍の隆起帯とが関わる“関東造盆地運動”がもたらしたものとされ、1万8千年前の最終氷期最盛期から6千年前までの間にかけて、海水準が120m以上上昇したとされ、完新世海進、後氷期海進を指す海進であり、すなわち最終氷期の最寒冷期後(1万9千年前)から始まった温暖化にともなう海水準上昇を指します。ピーク時である約6,500年～約6,000年前まで上昇が続き、ピーク時およびその数百年間の海進を強調し縄文海進と呼ぶ場合もあります。(ウィキペディア)

このように、本八幡付近一帯は、幾多の海進海退を経て形成された起伏の少ない地形と比較的新しい地質からなり、千葉方面にかけては電車



P-2 千葉県中央から北部地質図 (産業技術総合研究所)



P-3 第四紀の気候変動(Petit et.al,1999年)



P-4 関東地域の旧海岸線 東木龍七 1926

の窓から海岸線に平行な黒松林が低所から高所まで随所に遠望され、上記の旧汀線に沿った植生あるいは人口植林と考えられます。

ウォーキング出発点のJR本八幡駅付近は、地質的には低湿地・谷底低地堆積物(ab)分布域で、京成八幡駅との中間のJR線に平行な境界から丘陵麓にかけては巡行順に市川市役所・下総国鎮守葛飾八幡宮・水木洋子邸・山下清旧在籍の八幡学園跡の古八幡(ふるやわた)バス停・永井荷風愛用銭湯跡駐車場・白幡天神社・市川市立八幡小所在地は、皆砂州・浜堤堆積物(as)分布域となります。

JR本八幡駅付近は近年に開発されたビル群に囲まれていて活況を呈していますが、京成八幡線付近から北側は古くからの高級住宅街で、道路はやや狭くうねっているものの比較的ゆったりとした土地・間取りの閑静な環境で、水木洋子邸もその一角を占め余裕が感じられました。

京成八幡線踏切を挟む参道を過ぎて、下総国鎮守葛飾八幡宮の広々とした境内には本宮はじめ幾つもの石碑や古木や造営物が点在し、古来から続く清々しい空気感が漂い、しばし古の様々な歴史が走馬灯のように駆け巡る感が致します。寛平年間(889年～898年)に宇多天皇の勅命により石清水八幡宮を勧請して建立され、下総の国を守護する総鎮守として崇敬されてきたそうです。歴代平将門、源頼朝、太田道灌、徳川家康や数多くの関東武士や下総国・上総国・安房国からの信仰を集め、近年も永井荷風、幸田文、幸田露伴、伊藤左千夫、宗左近、大岡信など多くの文化人に拝され、親しまれた神社として知られるそうです。境内の巨木は千本公孫樹(せんぼんイチョウ)と呼ばれ、推定樹齢1,200年、樹高22m、根回り10.2m、目通り10.8mで、根回りより目通りが太く、国の天然記念物に指定されています。

千葉県 の 地 質 層 序

地域	房総主部(西-東)	房総南部	銚子	年代
完新世	沖積層	沼層・沖積層	沖積層	1
第四紀	① 下総群		立川ローム層 武蔵野ローム層 常総層	5 13
	② 下総群		香取層	30
	上群		豊里層	60
	総上群		飯岡層	100
	層			170
	群			500
	中群			1200
	新群			2400 (6400)
	古第三紀			
	白亜紀			
ジュラ紀				
三疊紀				

図 2.1-2 千葉県 の 地 質 層 序 (近藤, 1996 より)

P-5 千葉県 の 地 質 層 序 近藤精造 1996 年



P-6 下総国鎮守葛飾八幡宮 本宮

また、JR本八幡駅寄りには、「八幡の藪知らず」というかつての大竹林の一部が祭られています。

(ウィキペディア)

頼朝が掲げし白い旗 今本八幡白幡天神社に 風吹き渡る

勝也

白幡天神社

は、治承四年
(西暦 1180 年)
源頼朝が安房
の国に旗上げ
の際当地に白
旗を上げたこ
とをもって、



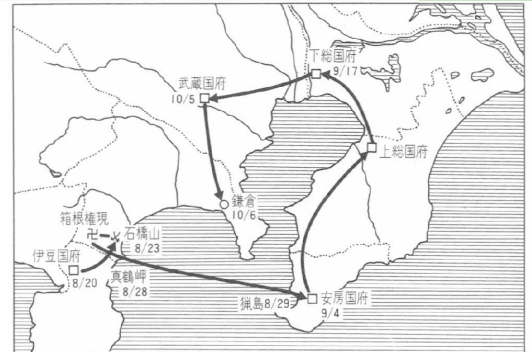
P-7 白幡天神社(源頼朝の由緒)

【白幡】と名づけられたと伝えられています。下総国鎮守
葛飾八幡宮同様、数々の歴史を感じさせ、静寂で清々し
い空気感が漂っています。

1584 年(天正 12 年)正親町天皇の代に本殿再建の記録があり、1871 年(明治 4 年)に菅
原道真を合祀してから、社名に「天」の字が加えられ、白幡天神社と呼ばれています。現在の本殿
は、1880 年(明治 13 年)に造営され、拝殿・幣殿は 1961 年(昭和 36 年)に造営されました。

(ウィキペディア)

水木洋子は、戦後の日本映画黄金時代を代
表する作家で、「浮雲」「ひめゆりの塔」「あにいも
うと」「ここに泉あり」「キクとイサム」「竜馬がゆく」
他の名作を手掛け、“第 1 回菊池寛賞”“紫綬褒
章”“勲四等宝冠章”等を受賞され、終生市川市
八幡に居住し、没後住居を含め一切の財産を市
川市に寄贈し、市川市の名誉市民に選出され、
現在も市民に敬愛されておられます。2003 年
4 月 8 日、92 歳で死去されました。(ウィキペディア)



P-8 源頼朝の進路

(源頼朝の挙兵と武蔵武士)

伊豆国府 8/20⇒石橋山の合戦 8/23⇒箱根
権現⇒真鶴港から渡船 8/28⇒安房国府 9/4
⇒上総国府⇒下総国府 9/17(本八幡)⇒武蔵
国府 10/5⇒鎌倉 10/6



P-9 水木洋子邸前にて

山下清は、数奇な運命を辿った放浪の画家で、驚異的な映像記憶力の持ち主であり、旅先で
ほとんど絵を描くことがなく、八幡学園や実家に戻ってから記憶をもとに描くというスタイルで、
代表作に「花火」「桜島」「東海道五十三次」などのちぎり絵やペン画を主流とした作品を多く遺し

ており、全国で展覧会が多く開催されています。
私が少年の頃、郡山市立図書館で開かれた巡回
展でご本人を拝見しました。

人生の記録が「放浪日記」(1956年<昭和
31年>)にまとめられ、“日本のゴッホ”や“裸の
大将”とも呼ばれ、映画にも描かれました。

1971年(昭和46年)7月12日、名古屋の熱
田神宮に滞在中、脳出血のため49歳で死去さ
れました。(ウィキペディア)

永井荷風は、明治時代のエリート官僚だった父・久一郎が天下
って後大実業家となり成功しましたが、その子として出生し順調に
青年期まで進み、その間母親の影響で歌舞伎や邦楽に親しみ、更
に漢学者・岩溪裳川から漢学を、画家・岡不崩からは日本画を、内
閣書記官の岡三橋からは書を学びましたが、病気になり休学した
り第一高等学校入試に失敗した後、放蕩生活を送る傍ら文学に目
覚め、小作品を世に出しました。更に、官立高等商業学校附属外国
語学校清語科(現:東京外国語大学)に入学し、1899年に中退し
ました。

息子の行く末を案じた父の計らいで、米国や仏国に遊学と銀
行などに勤務しながらオペラや演奏会に足繫く通い、帰国後「あめ
りか物語」や「ふらんす物語」を著し、夏目漱石の依頼で東京朝日新
聞に「冷笑」を連載したり、“新帰朝者日記”、“深川の唄”などの傑
作を発表しました。鷗外、漱石のほか、歌舞伎作家の岡鬼太郎や木
村錦花らと共に小山内薫や二代目市川左團次ら、後に松竹入りす
るこれら“演劇革新運動”の先頭に立つ演劇文化人関係者たちと交
友を持ちました。これらの縁で、森鷗外と上田敏の推薦で慶應義塾大学文学部の主任教授とな
り、極めて個性的な講義を行ない、後にこの講義から佐藤春夫、澤木四方吉、水上瀧太郎、松本
泰、小泉信三、久保田万太郎などの人材が輩出しました。更に、木下杢太郎らの“パンの会”に参
加して谷崎潤一郎を見出したり、訳詩集「珊瑚集」の発表、雑誌“三田文学”を創刊し谷崎や泉鏡



P-10 山下清 長岡の花火
(PRINTING CHUETSU)



P-11 永井荷風
近代日本人の肖像 国会図書館



P-12
市川市役所ロビーの復元像

花の創作の紹介などを行っています。また、西園寺公望にも可愛がられ、“雨聲会”に、鷗外、鏡花、島崎藤村、大町桂月、広津柳浪、田山花袋ら先輩の文学者らと参加しました。

子供の頃から、親の転勤で国内はもとより上海などにも転居し、成人してからも転居を繰り返して、東京大空襲で罹災後岡山・兵庫に疎開していました。

終戦後ただちに上京し、知人宅、船橋市海神、市川市菅野などを転居し、1957年(78歳)、八幡町四丁目(現:八幡三丁目)に居を定め、これが彼の終の棲家となりました。

ただし、この間奔放で辺りかまわぬ性格は周囲の鬱鬱を買ったり、悶着を起したりで、人間関係はギクシャクしたこともあり、全財産の殆どを鞆に入れて持ち歩くなど、かなりの変人であったようです。

帰京後、“罹災日録”や佳作とは言えない新作を幾つか発表し、さらに浅草ロック座などで「渡り鳥いつ帰る」「春情鳩の街」などの荷風作の劇が上演されました。

晩年、1952年11月“文化勲章”を受章し、翌年“日本芸術院会員”に選ばれるなど名誉に包まれましたが、相変わらず女性関係は盛んで、奔放で勝手気ままな生活は変わらず、一見華やかな反面、孤独な晩年でもあったようです。

1959年4月30日 胃潰瘍の吐血による窒息死をなさいました。(“荷風外傳”)。(ウィキペディア抜)

以上



荷風追想

多田蔵人編

録 201-3
岩波文庫



左
色街の女たちと戯れる

右
八幡界限を散歩する

孤独な荷風の日常

《死んだら遊女たちと同じ『三ノ輪の浄閑寺』に埋葬してくれ》⇒遺言は叶わず「雑司ヶ谷」に埋葬